

中国語音節カタカナ表記ガイドラインについて

福嶋 亮大

1

近年、新聞、映画、アート、出版、音楽その他多くのジャンルで、中国の人名・地名のカタカナ表記がなされるようになってきた。しかし、残念なことに、その表記はときに不正確で、不要な混乱を招いている。本誌読者のなかにも、書籍やマスメディア上でいい加減なルビを見つけて、驚いた経験のある方は多いのではないかと思う。

特に問題が頻発するのは、英語圏の著作を中国語に翻訳するときである。梁啓超 Liang Qichao をリヤン・キチャオ、閻錫山 Yan Xishan をヤン・シーシャンとする類のミスは、ピンインをローマ字でそのまま読んでしまったがために生じて

いる。似たような話で、以前にも「ユン・チアン」(『ワイルド・スワン』の著者・張戎)

という表記が間違っているということや、矢吹晋氏と『ワイルド・スワン』の翻訳者のあいだで論争が発生したことがあり、メディア上のカタカナ表記の杜撰さはすでに一部では知られていた。しかし、状況は今も改善されたわけではない。率直に言って「こんなルビならぬというほうがマシ」という書籍は、いまだに散見される。

むしろ、こうなった原因は、編集者の側の怠慢にもあるだろう。ルビのミスと言っても、多少中国語に通じた人間にチェックを頼めば、すぐに解決されるようなものばかりである。その点では、僅かな手間を惜んでいると言われても仕

方がない。

とはいえ、現場ばかり責めてもあまり意味はない。そもそも、この種の単純なミスは、信頼に足りる表記ガイドラインが誰にでもアクセスしやすい形で——今ならウェブサイトに——存在していれば、ほとんど未然に防げるようなものである。それに、中国語に通じている人間にとっても、たとえば「張」や「鄭」をどう表記するか(チャン/ジョン、それともジャン/ジョン?)は悩ましいし、一冊の本における表記の全体的整合性などを考え始めれば、それだけで無駄な時間をとられてしまう。その点、ガイドラインがあれば、ミスと労力がともに減って一石二鳥ではないだろうか。

そこでこのたび、中国語学者の池田巧氏（京都大学人文科学研究所准教授）が一年前学会で提案された「現代中国語音節カタカナ発音表記」の試案を下敷きしつつ、新聞社の準則や各種中日辞書なども参考にしながら、新しいガイドラインを作成し、ウェブ上で公開する運びとなった。その際に、平凡社の方のご好意でウェブサイトを貸していただけることになり、ガイドラインはその平凡社のサイト上に近日中にアップロードされる予定である（当初はβ版として公開予定）。わざわざ出版社のサイトをお借りしたのは、そのほうがガイドラインの社会的信頼性を獲得しやすいだろうと考えたからである。正規版に移行する前に、多くの方にチェックしていただきたいので、アップロードされた暁には、是非ご意見をいただければと思う。

むろん「中国語のカタカナ表記そのものが問題で、日本の漢字音で読んだほうがよい」という反論があることも重々承知しているが（そもそも監修の池田氏も

実は「日本の漢字音で読むべき」派である。また、漢字をどう読むかは日本思想史上の大問題であり、本来は慎重な議論を要する）、今のメディア状況を見る限り、カタカナ表記の傾向は今後強くなることはあっても、弱くなることはないだろう。社会のこの大きな流れを考えれば、純粹に理想だけを掲げてもらえない。池田氏も筆者もいかなれば「リアリスト」として、現実を多少とも改善するべく、ガイドラインを提案していると考えてもらえれば幸いだ。

2

むろん、筆者自身は別に中国語の専門家でも何でもないのですが、どのような表記システムが最善かは分からない。しかし、大前提として、中国語の発音にあまりに忠実すぎる案では、煩瑣すぎてメディアでは使ってもらえない。これまでも、カタカナ表記についてはいくつかの案が提起されてきた。そこには優れた仕事もあるが、そのぶん、実務性が欠けていた

印象も受ける。

そこで今回は、語学教育的な問題（＝正確さ）と出版上の表記の問題（＝実務性）ははっきり区別することにした。平凡社ウェブサイト上では、池田氏の原案（より実際の発音に近いもの）と、それをメディア関係者向けにアレンジした簡略版（より実務的なもの）の二つのヴァージョンをアップロードする。通常のルビについては後者の簡略版を使ってもらい、語学教育上のより繊細なルビが必要なときは前者を使ってもらえばいい、という趣旨である。最も重要なのは、現場の方々に「使おうという気持ちになってもらうこと」であり、そのためには正確さにとだわるだけでなく、ある程度の歩み寄りが必要となる。結局、ガイドラインが根づくも根づかないも、いわば「ユーザー視点」に立てるかどうかにかかっているからだ。

実際、今回の企画の発端そのものが、筆者が Twitter 上でたまたま「カタカナ表記のガイドラインってあると便利じゃ

ないですかね？」と問いを投げてみたところ、何人かの編集者やアート関係者から好意的な反応をいただいたことになった。ユーザー（市民）の側には、おそらく一定の需要がある。そこを起点にして、徐々に拡散させていけばいいのではないか。

問題は、中国の人名・地名の入ってくるルートそのものが今やきわめて多様化していることである。現代の日本人にとって、なじみのある中国人と言えども、それはミュージシャンや映画監督、俳優、さらには現代アーティストなどであり、しかもそれぞれの業界がそれぞれ独自のやり方で名前の表記をしている。出版界

だけが中国人の命名権利を「独占」しているわけではない。美術館や映画配給会社、レコード会社など、多くの組織がそこには関与している。

そのすべての業界にガイドラインを届かせるのは、確かにとても難しい。特に、マーケットが関わってくる場合には、発音の正しさ以上に、言葉の美的感覚が重要になってくるので、そもそもガイドラインに縛られたくないという気持ちも強いかもしれない。とはいえ、中国語のカタカナ表記は、別につねにそうした美的感覚が要求されるわけでもない。書籍の出版に際しては、むしろ中立的かつ機械的にルビをふりたい、というニーズも必

ず存在するはずだ。
幸い、今のネット社会では、情報の拡散のコストは格段に下がっている。マメな「営業努力」さえ怠らなければ、すべての領域はカバーできなくても、それなりの流布は見込めるのではないだろうか。趣旨に賛同していただける方は、ぜひネットその他で「宣伝」に協力していただければと思う。

3

念のために付け加えれば、ガイドラインと言っても、それは決して絶対的なものではない。現場のメディア人の方々が、最も中立的で無難なルビをふ

●筆の動きが手に取るようにわかる！

精選 拡大法帖

◆第1回配本 5月刊

2 王羲之 蘭亭叙 [馮承素摹本]

書の基礎古典を選び、拡大して半紙大に六字を収めたカラー臨書手本。原色の拡大図版を採用する事で筆路が飛躍的に鮮明となった。巻末に解説と釈文・訓読を収録。

A4半裁・カラー128頁 ●1890円(税込)

◆次回配本 6月刊予定 *以下続刊

1 王羲之 蘭亭叙 [虞世南臨本]



二宮社

東京都文京区本駒込6-2-1
Tel.03-5395-0511 <http://nigensha.co.jp>

りたいと思ったときの一種の「参考」として使ってもらうことを念頭に置いている。したがって、使用を強制するものはまったくない。さらに、既存の読み方を否定するものでもない。たとえば、章子怡を「チャン・ツイイー」と表記するのはすでに慣行になっていたので、今さらその読み方の変更を要求するのは無意味だろう。むしろ、このガイドラインは、これから新たに加わる人名・地名の表記のための参考資料だと考えていただきたい。

それは大前提として、しかし個人的な考えを言えば、筆者は（何か特別なこだわりがない限り）本来は外国語のカタカナ表記は一元化し、ルビも機械的・自動的にふるようになったほうがよいと思う。というのも、今の情報社会においては、表記がちよっと異なっているだけでは、検索の際に大きな障害となるからだ。英語の人名でも、たとえばジェームズ／ジェームス／ジェイムズ／ジェイムスと実に四通りの表記があるが、こうした

「多様性」には何らメリットがない。図書館やネット書店での書籍検索の際に、著者名がうまくヒットせず、イライラした経験をお持ちの方は多いのではないかと思う。

さらに、一人の物書きとしての立場から言っても、正書法がないというのはとくに非常にストレスがたまる。たとえば、一冊の本をまとめるときでも、前後の表記上の整合性には気を遣わなければならぬ。編集者も書き手も、そういう細かいチェックに労力を使っているわけだが、こうした現状は決して効率的とは言えないだろう。

ちなみに、いくつかの新聞社や出版社に問い合わせをした限りでは——いずれも大変協力的に情報を提供してくださったことは付記しておきたい——、カタカナ表記の絶対的基準が決まっているケースは少なく、おおむね著者のふつたルビを尊重し、もし明らかな間違いがあれば校閲が指摘する、という手順で動いているところが多いようだ。あるいは、場合

によっては、編集者そのつど中国語話者のチェックを仰いで、その発音に近いルビをふっていることもあるらしい。

当然ながら、これらの方式では「細部がちよっとずつ違う複数の表記」が乱立することになる。しかし、たとえば「毛沢東」の読み方について「マオ・ツァトン」「マオ・ズアドン」「マオ・ゾードン」……などと細かい差異が生じてしまうのは、決して望ましいことではないだろう。あるいはまた、チャン・イーモウ（張芸謀）とジャン・シヤオガン（張暁剛）のように、同姓なのに表記が違うというケースが多発するのも、やはり望ましくない。

繰り返せば、今回のガイドラインはいかなる強制力も持たない。しかし、カタカナ表記の大きな方向性や意志を示すのには役立つだろう。逆に、このまま何も方向性を示さないでいると、表記はますます悪い意味で「多様」になってしまい、英語の人名表記と同様にバラバラの不便さを甘受せねばならなくなることが予想される。タイミン格的にも、まさに今、

表記のインフラ整備をやっておくのがベターなのではないだろうか。

4

最後にテクニカルな問題を一つだけ述べたい。周知の通り、中国語圏はきわめて广大であり、また多様である。仮に徹底した現地語主義で行くならば、中国語圏の諸地域にに応じて表記を書き分けなければならない。しかし、それは明らかに不可能なので、原則的には、カタカナ表記は北方の普通話の発音に準拠するしかないだろう。

とはいえ、すべてに拘り定規に対応することもない。たとえば、あるひとから「香港の作家をどうするのか?」という類の質問をいただいた。この点についてはやはり、世界的に最も流布している表記に準じるのが現実的ではないか。具体的には、王家衛 (Wong Kar-wai) はワン・ジァウウェイではなくウオン・カーウアイで、謝霆鋒 (Nicholas Tse) はシエ・ティンフォンではなくニコラス・ツェーで、従来通りいけばいいと思う。グローバル

に活躍する中国語圏のアーティストについても、同様のやり方で表記の原則を決めればいだろうか。

そもそも、カタカナ表記の広がりそのものが、グローバル・スタンダードに従うことを意味するとも言える。実際、毛沢東を「もうたくとう」と読んでも日本人しか理解できないのだから。その点で言えば、カタカナ表記の根本的な理念は、中国の人名・地名を世界的に最も一般的なやり方で記すことにあると言えるかもしれない。仮にそうやって方針を定めておけば、香港の作家の表記について悩むことはないと思うのだが、いかがだろうか。

改めてまとめれば、今回のガイドラインは(1)ルビのミスや編集上の労力をできるだけ減らすこと、および(2)検索の時代に合わせて、表記が過度にバラバラにならないように大きな方向性を示すこと、この二点を大きな目標にしつつ、できるだけ実務的で使い勝手のよいものを目指している。先述したように、筆者自

身は別に専門家ではなく、あくまで一介のコーディネーターでしかないが、できるだけ多くのメディアの方に知ってもらえるように、地道に活動をしていくつもりだ——というわけで、興味を持たれた方は、是非一度アクセスしてみてください!

(ふくしまりょうた 批評家・中国文学者)

■専修大学L研究室主催 第4回外国語教育研究会 王兵監督「鳳鳴」(フォンミン) ———— 「中国の記憶」の上映と討論

ドキュメンタリー映画「鳳鳴」(フォンミン) ———— 中国の記憶 (王兵監督・中国・2007年) 2007年山形国際ドキュメンタリー映画祭インターナショナルコンペティション部門大賞受賞の上映を通して、なまの中国語に触れつつ、現代中国の社会を理解するとともに、言語と映像の問題、および中国人が社会や歴史にいだいている感情について討論します。討論・船橋淳(映画監督) / 進行・土屋昌明(専修大学教授) ▼6月4日(午後1時30分~6時15分)▼専修大学神田校舎1号館2階2004号教室(地下鉄神保町・九段下駅下車3分) ▼入場無料▼作品提供・特定非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭▼お問合せ・土屋昌明 (the0561@isc.senshu-u.ac.jp)